



## 幼稚園年長児のスキー体験における挑戦的意欲を支える環境の構成と保育者の援助

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-10-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 本田, 真大, 伊藤, 公美子, 滝谷, 舞 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00006794">https://doi.org/10.32150/00006794</a>

## 幼稚園年長児のスキー体験における挑戦的意欲を支える環境の構成と保育者の援助

本田 真大・伊藤公美子\*・滝谷 舞\*

北海道教育大学函館校 学校臨床・子育て支援研究室

\*北海道教育大学附属函館幼稚園

### The Process of Motivation for Challenging Tasks (Play, Work) in Skiing in a Kindergarten Classroom: A Study on Environmental Construction and Support for Teachers

HONDA Masahiro, ITO Kumiko\* and TAKIYA Mai\*

Department of Education, Hakodate Campus, Hokkaido University of Education

\*Hakodate Campus, Hokkaido University of Education Kindergarten

#### ABSTRACT

The purpose of this study was to examine the process of motivation for challenging tasks (play, work) in a kindergarten classroom of five-year-old children. Through observations of skiing and early childhood education and care conferences, the process of motivation was illustrated. Furthermore environmental construction and the support of teachers, which could enhance the motivation for challenging tasks (play, work) were suggested.

Keywords : motivation for challenging tasks (play, work), documentation, early childhood education and care conference, kindergarten

#### 問題と目的

##### 幼児教育の質

近年、国際的に乳幼児期の教育とケア（Early Childhood Education and Care, ECEC）の質の重要性が指摘されている（OECD, 2006 星・首藤・大和・一見訳 2011）。そして、我が国におけるECECの一つである幼児教育の質を考えるうえで欠かせない概念が社会情動的スキルである。

社会情動的スキルとは「(a) 一貫した思考・感情・行動のパターンに発現し、(b) 学校教育またはインフォーマルな学習によって発達させることができ、(c) 個人の一生を通じて社会経済的成果に重要な影響を与えるような個人の能力」と定義され、認知的スキルと密接に関連しながら発達すると考えられている（OECD, 2015 池迫・宮本・ベネッセ教育総合研究所訳 2015）。

無藤（2016）は社会情動的スキルの育成という

点から見た我が国の幼児教育の課題の一つに粘り強さや挑戦する気持ちなどの育成がそれほど重視されていない点を挙げている。さらに、秋田(2016b)は挑戦的意欲は幼児期の教育の質の高さに直結する課題であると述べている。

### 幼児の挑戦的意欲

秋田(2016a)によれば、挑戦的意欲とは「何かに向かってチャレンジする、自己の能力の限界を超える経験を行う」ことを意味し、「チャレンジ」とは「十二分に持てる注意や力や知識を発揮している様相」である。そして、「それぞれの子どもの思いやこだわりがさらに探究や創意工夫となっていく過程」を挑戦的意欲ととらえている。

具体的な挑戦のプロセスとして、野口(2016)は「安定」(情緒的な安定や保育者との関係による社会的安定)、「興味・関心との出会い」(主体的に環境に関わることでの出会い)、「対象との関わり」(環境・保育材が子どもにとって意味あるものになり、比較、測る、数える、並べるなどの関わりの中で試行錯誤や工夫をする)、「仲間との関わり」(憧れ、自分もやりたい・挑戦したいという意欲が喚起される、まねをしたり刺激を受けたりしてさらに挑戦しようとする、競う、見てほしい、集団の中の役割意識、などが出てくる)、「自分なり・自分たちなりの目的」(自分や他児の活動を振り返ることができる環境の中で、仲間とともに挑戦する機会が増え、乗り越えた達成感やどうしてもできない中で妥協して気持ちに折り合いをつけること、自分なりに表現することの楽しみを見出す等の自分なりの目的を伴った挑戦が生じる。また、仲間と挑戦し試行錯誤する、発見と探究の中で相手への配慮、承認、許容が生じ、共通の目的をもって挑戦する機会も生じる)、という5つの過程を示している<sup>注1)</sup>。

挑戦的意欲に関する研究は未だ少ない中、本田・伊藤・滝谷(2018)は野口(2016)の挑戦のプロセスに沿って年長児9名がレゴブロックを使って遊ぶ事例を分析している。その結果、幼児の挑戦的意欲を支える要因として「幼児の主体性

の発揮」,「個々の多様な経験の蓄積を仲間とともに発揮できる環境」,「『自分の目的』にこだわった作品で『自分たちの目的』に臨む構造」,の3点が重要であると提案している。

本田他(2018)では自由遊びの時間に観察された遊びの様子を分析したものであり、挑戦的意欲の様相は子どもの生活や遊びによって異なるであろう。そこで、本研究では本田他(2018)の屋内の自由遊びとは異なる状況として、全身の運動と技能が要求されるスキーの体験を行った設定保育の事例を取り上げ、挑戦的意欲について検討する。

### 幼児の運動能力と挑戦的意欲

幼児期運動指針(文部科学省,2012)によれば、動きの獲得には動きの多様化(立つ,座る,ぶら下がる,走る,投げるなど)と動きの洗練化(力みやぎこちなさが減少し滑らかになった,目的に合った動き)という2つの方向性がある。3~4歳頃には全身を使った遊びなどを通して体のバランスを取る動き(寝転ぶ,渡る,など)と体を移動する動き(走る,よける,など)を獲得し,4~5歳頃には環境とのかかわり方や遊び方を工夫しながら用具などを操作する動き(持つ,運ぶ,投げる,捕るなど)を獲得し,5~6歳頃には動きの洗練化(体のバランスをとる動き,身体を移動する動き,用具などを操作する動き)が期待される。

そして、運動発達には運動体力(筋力,瞬発力,持久力など)と運動コントロール能力(視覚や聴覚などを手掛かりとした運動の統制)の2つがあり、運動体力は青年期にトレーニング効果が最も大きくなる一方、運動コントロール能力は幼児期から児童期にかけて急激に発達するとされる(杉原,2014)。特に幼児期の運動指導の在り方として、運動能力の発達には子ども自身の自己決定的で自発的な遊びが有効であることが示されている(杉原・吉田・森・筒井・鈴木・中本・近藤,2010)。

スキーやそりなどを用いた雪との触れ合いは幼児期運動指針(文部科学省,2012)で5~6歳頃

に期待される動きの洗練化と関連すると思われる。保育の中でスキーを扱った一連の実践が報告されている。平岡・小田・関原・小西（2012）はスキーの経験の少ない年長児の8回の活動（園庭で2回、スキー場で6回）を報告している。幼児のグループを技能別に分け、インストラクター、保育者、保護者によるボランティアが参加し、多くの大人がほめたり励ましたりする中で幼児が一層頑張り困難を達成できたと振り返っている。平岡・小田・小西・山本・村中（2013）も同様の8回の実践を行った中で、保育者側が技術の習得に意識がより強く向かっていったと振り返っている。平岡・小田・山本・松尾（2014）は「保育のねらい」、「活動内容」、「留意点・援助」等を明確にし、インストラクターと保育者が共有した。その中で、技術の習得だけではなく「気づき」や「育ち」への意識を持って取り組むことを事前に確認している。平岡・小田・村中・細田（2015）は上述の3年間の実践と子どもの実態から、雪上に出る前に実際の動き方を屋内でスキー靴を着用せずに練習する機会を設けるなど、継続的な実践の取り組みの中で工夫を重ねたことを報告している。

これらの一連の実践から、保育の中でスキーを取り上げるには各自の技能に応じてスキーを楽しめる環境（雪、平面、斜面など）、安全面の配慮（一定数の大人の存在など）、幼児が安心して取り組みたり達成感を味わったりするための保育者の援助、が欠かせない一方で、技能の習得に意識が向きやすいという課題があると思われる。さらに杉原他（2010）を踏まえ、幼児の自己決定的で自発的な遊びという要素をいかに取り入れるかも重要な点である。つまり、スキーを体験する設定保育の中で幼児の主体性がより発揮されるような環境の構成と保育者の援助を考えることが不可欠である。本研究ではスキーの体験で見られる幼児の姿を挑戦的意欲の点からとらえ、挑戦的意欲に影響したと思われる環境の構成と保育者の援助を検討することとする。

## 保育で見られる挑戦的意欲の分析方法

ECECの質の発展のために世界各国でドキュメンテーションが活用されている。具体的には写真を効果的に用いた記録としてのドキュメンテーション、対象となる子どもの経験を追った記録の集まり（写真、子どもが描いた絵や作品など）としてのポートフォリオ、子どもの経験に内在する学びを見取る記録としてのラーニング・ストーリーなどがある（請川・高橋，2016）。挑戦的意欲の研究では挑戦のプロセスを検討することが重要であり（秋田，2016a；野口，2016），その検討のためには遊びの流れをとらえるドキュメンテーションの方法が適していると考えられる。

本田他（2018）は保育の観察者がドキュメンテーションを作成し、数日後に担任保育者と保育カンファレンスを行い幼児理解を深める実践を行っている。そして、そこで作成されたドキュメンテーションを資料として質的研究を行っている。本研究では本田他（2018）と同様の方法で分析する。

なお、ECECの質に関わる社会情動的スキル（非認知的能力、非認知的スキル）は幼稚園教育要領（文部科学省，2017）の中で「学びに向かう力、人間性等」を中心に「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力等の基礎」の3つの柱すべてと関連している（佐々木，2018）。そしてこの資質・能力の3つの柱が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として示され、今後の我が国の幼児理解の観点として求められるものと言える。そこで本研究の分析では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」からも事例をとらえることで、挑戦的意欲と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の双方の観点から行った幼児理解の関連を検討する。

## 本研究の目的

以上より、本研究ではドキュメンテーションを用いた保育カンファレンスを通して、設定保育として行われたスキー体験の中で見られる挑戦的意

欲の過程を抽出し、挑戦的意欲を支える環境の構成、保育者の援助について検討することを目的とする。

## 方 法

### 対象者

国立大学法人A大学の附属幼稚園年長クラス20名（男児13名、女児7名）を対象とした。

### 実施時期及び研究方法

2017年12月～2018年3月に研究を実施した。年長児の後半の時期を設定した理由は挑戦のプロセスが最も見られやすいと判断したためであった。

本研究の具体的な手続きは、まず予備的な観察（第1回）として12月に行われた行事（餅つき）を観察し、以降の研究方法について担任保育者と検討した。その後、自由遊び場面（12月、第2回）と設定保育場面（1月～2月、第3回、第4回）の観察を行い、各回の観察後に第一著者がドキュメンテーションを作成した。観察時には適度に幼児と関わり合いながら、コンパクトデジタルカメラによる撮影とフィールドノートによる記録を行った。ドキュメンテーションの様式は本田他（2018）と同一であり、A3用紙2枚分の1枚目には研究者である第一著者が観察した場面の流れが表現されるように写真と言葉で遊びの様子を記述した。2枚目には「子どもたちの挑戦の過程（プロセス）」、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）との関連」、「振り返りと考察（挑戦的意欲を支える環境の構成・保育者の援助）」という欄を作り、第一著者が記載して保育カンファレンス時に提示した。ドキュメンテーションの作成に当たっては高橋・小林（2016）と同様に保護者等に公開することを前提として作成した<sup>注2)</sup>。

第2回～第4回の各観察日から約1週間後に幼稚園にて担任、副担任保育者と約20分間の保育カンファレンスを行った。保育カンファレンスでは第一著者が作成したドキュメンテーションを提示

し、1枚目の遊びの流れを研究者と保育者で共有した後、2枚目を見ながら保育者が有する子どもの背景情報や観察日の前後の遊びの実態について情報共有を行うとともに、各欄に関する保育者からの幼児理解及び今後の環境の構成と保育者の援助の案を検討した。

### 分析方法

本研究の分析においては第2回～第4回の観察のうち2事例を検討した。採用した事例は設定保育としてスキー体験をした日のものであった。

事例の記述方法について、本研究では遊びの流れを重視したドキュメンテーションを作成したことから、遊びの流れを詳述する河邊（2015）の方法（「遊びの概要」、「遊びの流れ」、「分析」、「考察」）を参考にドキュメンテーションとフィールドノートを基に事例を書き起こした。具体的には、河邊（2015）は対象児の行為を遊びの状況と遊び課題の点から分析したのに対し、本研究では設定保育の場面を観察・記録し、各回の流れを記述した上で挑戦のプロセス（野口、2016）の点から分析した。その後、各プロセスと関連すると思われる環境の構成と保育者の援助を抽出した。そして、事例の様子を幼稚園教育要領（2017）に示される「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の観点からとらえ、挑戦的意欲と対応づけることを試みた。

## 結果と考察

### 1. 遊びの概要

1月下旬、登園後の設定保育でスキー体験を行った。スキーの経験のある子もいれば初めて体験する子もいるクラスであった。

毎年、用務員が園庭に雪の道を作っており、園庭の隅にある築山まで続いており、雪の道を通って築山を登って滑る体験をした。本事例の前に行った第1回目の設定保育では、スキーの靴のサイズ合わせのためスキー靴を履いて雪上を歩いた後、片方の足にスキー靴を履いてストックで漕いで滑る（片方の足に体重を乗せて移動する）こと

(片足スキー) 経験をした。第2回目の設定保育までの数日間、自由遊びの際に片足スキーを希望する幼児にその機会を作るようにした。そして、第2回目までにはほぼ全員が片足スキーを上手に行うことができるようになった。

本事例はスキー体験の第2回目と第3回目であった。

#### 事例1：第2回目のスキー体験(午前中約1時間)

幼稚園で両足にスキーを履いて歩いたり滑ったりする最初の機会であった。2グループに分かれて、1つのグループは担任保育者1名とスキーの講師によるスキー、もう1つのグループはスキーを使わずに担任保育者1名と自由に園庭の雪で遊んだ。

全員がスキーウェアに着替え、スキーで滑るグループはスキー靴を自分で履いて園庭に出た。スキーの講師は担任保育者1名とその母親であった。まずはスキー、ストックを持って歩き、築山の近くの平らな場所でスキーを履いて歩いた。「上手く履けない。」とつぶやいて苦戦する幼児に講師は「ストックで体を支えて、スキーは体の近くに置いて、力を入れて踏むよ。」と幼児のスキーの扱い方を見て細かく履き方を伝えていた。<sup>①</sup>幼児たちはスキーで移動する際に、どのように体を動かすとうまく歩いたり滑ったりできるかを考え、様々な動き方を試して確かめていた。

その後、講師の「カニさん、カニさん、・・・。」という合図を聞きながら築山の斜面を横向きに登った。<sup>②</sup>滑り降りる際には、恐る恐る滑る子もいるが、スキーの講師と担任保育者が子どもに合わせて体やスキーを支えて滑る練習をした。<sup>③</sup>天候が悪く前を向きにくく、築山に登る直前の斜面で止まった状態でも転びそうになるために下を向く子どもが多かった。また、多くの幼児が滑ることに必死な様子であり、仲間同士の会話が少なかったが、他児が築山を滑る様子を見ている幼児が数名いた。

何度か滑った後、園舎までスキーを履いたまま戻った。この時には自分のペースで滑ることができ、築山を滑る時よりも安心した表情になる子ども

が多かった。うまく滑れない幼児も途中であきらめずに目的地までスキーを履いたまま滑っていった。園舎に戻った子どもから自分でスキーウェアを脱ぎ、手洗い、うがいをし帽子をストーブの前に置いて乾かした。

#### 事例2：第3回目のスキー体験(午前中約1時間)

クラスを半分に分け、サーキットのグループは一人2、3周し、もう一方のグループは雪の中で自由に遊んだ。

幼児たちは前回と同じスキーの講師に親しみを持って接した。同じ園庭でスキーのサーキットを行った。この日は天気が良く視界も良好であった。サーキットは、築山を登って滑り、トンネル(2本のポールで三角形を作ったもの)をくぐり、玉入れをし(1人2つ、紅白のお手玉を高さ1.5mほどの高さのかごに入れる)、風船タッチ(ポールにつけた風船に背伸びやジャンプをして触る)をして、築山のふもとに戻るコースであった。<sup>④</sup>

保育者は予め保育室で模造紙に園庭に作ったサーキットのコースを描きながら説明を行い<sup>⑤</sup>、滑る高さ(築山の下、真ん中、上)と滑り方(グー、飛行機、パー、ぶんぶんぶん)を自分で選び組み合わせて滑ることを確認した。スキー用具の扱い方や体の動かし方が前回よりもうまくなっており、一人ひとりが滑るのに前回ほどには時間がかからなくなった。

園庭に出て、今回は園舎の前からスキーを履いて築山のふもとまで移動した。平らな道を滑ることに苦勞する幼児には講師が「お腹を引っ込めて、ぐーって押すよ。」と体の使い方を伝えていた。<sup>⑥</sup>築山のふもとで行ったスキーを履いたままでの準備体操では、サーキットに必要な運動(しゃがむ、背伸びする、ジャンプするなど)を取り入れた。<sup>⑦</sup>保育者は幼児たちが築山の斜面に登る際に「(スキー板の)後ろも上げるよ。カニさん、カニさん、・・・。」と適宜伝えていた。<sup>⑧</sup>幼児は1人ずつ滑る高さや滑り方を講師に伝えてから滑った。その際、担任保育者は斜面の下にいて幼児を迎え入れた。滑る際に下を向く幼児には「こっち見てねー。そうそう！」と呼びかけ、幼児の視

線を上げることで滑る姿勢が安定するように働きかけた。<sup>⑨</sup>

滑り降りた先をトンネル、玉入れ、風船タッチというサーキットにしたことで、トンネルでは上体を少しかがめて平らな道を滑る（園庭から築山のふもとまで移動したときと同様の滑り方をする）、玉入れではスキーを履いたまま転ばないようにボールを拾い、ねらって投げる、風船タッチではねらってジャンプするなど、考えながら体を動かす場面が増えた。風船タッチでは保育者が1人1人の子どもに丁度よい高さ（背伸びしても届かず、小さくジャンプすれば届く程度の高さ）に調整する<sup>⑩</sup>ことで、子どもの挑戦したい気持ちが引き出されたようであった。

天候のよさとスキーへの慣れの影響か、前回よりも他児の滑る様子をよく観察し、前を滑る人にぶつからないように自分で注意して滑る様子が観察された。またサーキットにしたことで、トンネル、玉入れ、風船タッチの前で1～2人程度の順番を待つ機会が生じた。<sup>⑪</sup>待ち時間が長すぎないことも、飽きずに前の子どもの様子をよく見る機会となった。

## 2. 挑戦的意欲の観点からの分析と考察

### (1) 安定

スキーの講師が担任保育者の母親であると知り、驚きつつも初対面時から笑顔で話しかけるなど親しみを持って接していた。

本事例では第2回（事例1）の幼児のスキーの滑り方を見て安全に配慮された環境を構成し保育者とスキーの講師が援助を行った（下線部③、④、⑤、⑨、⑩）。例えば、第3回目（事例2）に築山を滑り降りる際に十分に安心できる関係にある保育者が築山の下で出迎えることで（下線部⑨）幼児が挑戦しやすくなったと思われる。これらのように、幼児の実態を踏まえて安全に配慮された環境を構成することも幼児の情緒的な安定につながり、挑戦的意欲の発露を促したと思われる。

### (2) 興味・関心との出会い

既にスキーの経験のある幼児も初めてスキーを滑る幼児もあり、経験の差が大きかった。スキー

を履けない幼児には履き方を具体的に教え（下線部①）、「難しくてできない」という諦めを感じる前に援助することでスキーとの出会いが否定的な経験にならずに取り組めたと思われる。

第3回目はサーキットにしたため（下線部④、⑤、⑦、⑩）、ただ滑るだけでなく「滑りながら何らかの動作をする」環境になった。サーキットの内容が第2回目の幼児たちのスキーの滑り方を見たうえで設定されたため、程よい難易度で興味・関心を高めやすかったと思われる。

### (3) 対象との関わり

築山などの目的地までスキーで移動したり、第3回目ではサーキットにしたことでより複雑な動きを要求されたりした。それらの状況で保育者やスキー講師の助言を得ながら（下線部②、③、⑥、⑧、⑨）、どのように体を動かすとうまく歩いたり滑ったりできるかを考え、様々な動き方を試して確かめていた。サーキットの中の風船タッチでは一人ひとりに応じて高さを調整することで（下線部⑩）諦めずに挑戦しようとする意欲につながったと思われる。

### (4) 仲間との関わり

第3回目では他児の滑る様子をよく観察していた。その背景には、天候のよさ（下を向かずに他児の様子を観察しやすい）、サーキットにしたこと（1～2人程度の順番待ちの機会、下線部⑪）、という環境の影響があったと考えられる。そして、観察したことを自分の機会に活かす様子も見られた。

### (5) 自分なり・自分たちなりの目的

怪我のないように実施する必要もあり、また経験の少ない幼児もいることから、第2回目は自由に滑る時間ではなく一定のコースを一定の方法で歩いたり滑ったりする時間とした。天候も悪く一人ずつ順番に滑る中でお互いの様子を見ていなかった（下を向いていた）ため、共通の目的を持っていたかどうか判断が難しい。ただ、うまく滑れない幼児も保育者とスキー講師の援助を受けて途中であきらめずに目的地までスキーを履いたまま滑った。

第3回目では築山からのスキーの滑り方（滑る位置と滑り方の組み合わせ）を一覧にして示し、幼児が自分で好きな滑り方を選べるようにしたこと（下線部⑤）、自分なりの目的を明確に持ちやすくなったと思われる。

## (6) 考察

事例とした2回のスキー体験の中から見出された挑戦的意欲の変化のプロセスと、それを支えたと思われる環境の構成、保育者の援助について考察する。

挑戦的意欲のプロセスの中で、スキー体験の第2回目（事例1）よりも第3回目（事例2）の方が「安定」、「興味・関心との出会い」が充実し、スキーの経験の蓄積と天候のよさ、幼児のスキーの様子を考慮した環境の構成（サーキット）が相まって「対象との関わり」「仲間との関わり」「自分なり・自分たちなりの目的」も深まったようである。また、保育者の援助としての具体的な助言が的確に行われ、うまく滑れなかったり築山を登れなかったりする子どもが助言を聞いて自分で体を動かすことでうまくできる達成感を味わえたと思われる。

2つの事例より挑戦的意欲の各プロセスを支えた要因を考えると、「安定」には冬の屋外の安全への配慮とスキーの姿勢を安定させる援助、「興味・関心との出会い」と「対象との関わり」には諦めない程度の難しさと幼児の様子に応じた適時の援助、「仲間との関わり」と「自分なり・自分たちなりの目的」には明確な目的の共有とお互いを観察する環境の構成、が挙げられよう。

### 3. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の抽出

本事例を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の点からとらえた内容をTable 1に示した。これらの内容は保育カンファレンス時に研究者が提示した内容と保育者によって語られた内容であった。また、複数の事項に該当すると思われる姿については特に関連が深いと判断された方に記載した。なお、特定の幼児の姿ではなく事例を通して観察された姿を記載した。さらに、本事例か

ら抽出された幼児の姿と挑戦のプロセス（野口, 2016）の対応を検討し、特に関連するプロセスとの対応を示した。

Table 1より、本事例の中で「興味・関心との出会い」と対応すると判断されたのは「社会生活との関わり」、「言葉による伝え合い」であった。言葉でのやり取りを中心に興味・関心を高めていくのは5歳児の特徴であるかもしれない。

「対象との関わり」は雪とスキー用具を扱う中で経験された「健康な心と体」、「自然との関わり・生命尊重」と対応すると思われる。スキーには動きの洗練化（文部科学省, 2012）に加え、準備と片付けと言った身辺自立も必要となるため、「健康な心と体」と関連する姿が多く見られたと思われる。

「仲間との関わり」には保育内容（人間関係）と関連する「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」との対応が見られた。前述のように事例2で目的を共有しお互いを観察する機会があったことで、お互いに約束を確認し合う姿にもつながったと考えられる。

「自分なり・自分たちなりの目的」は「自立心」と「思考力の芽生え」と対応すると思われた。特に「自立心」との関連では粘り強く取り組む姿、その中でも「自己の能力の限界を超える経験を行う」（秋田, 2016a）姿が見られたことから、本事例の中に挑戦的意欲のプロセスを見出すことができるであろう。

## 総合考察

### 1. 本研究のまとめ

本研究の目的はドキュメンテーションを用いた保育カンファレンスを通して幼児の挑戦的意欲を検討することであった。分析の結果、5歳児後半の設定保育としてのスキー体験に内在する挑戦的意欲の一つの過程と、それを支える環境の構成、保育者の援助を示すことができた。

#### (1) 本研究で見られた挑戦的意欲の特徴

本田他（2018）は室内の幼児主導の構成遊びの



Table 1 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」からの事例の整理と挑戦的意欲との対応

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」	挑戦のプロセス (野口, 2016)
<b>(1) 健康な心と体</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・スキー靴や板を自分で履き、終了後は自分で着替え、手洗いとうがいをし、帽子をストーブの前に置いた机で乾かすなど、一連の身支度を先生の指示を受けながらこなす（事例1）。スキー靴や板の準備と片付けを自分一人、または友だちに手伝ってもらって完了しようとする（事例2）。</li> </ul>	対象との関わり
<ul style="list-style-type: none"> <li>・両足にスキーを履いて目的地まで歩いたり滑ったりするときに、普段と違う体の使い方をするとともに、よく動ける体の使い方を見つけようとする（事例1, 事例2）。</li> </ul>	対象との関わり
<ul style="list-style-type: none"> <li>・スキーを履いたまま、サーキットの種目に合わせた体の動かし方をする（事例2）。</li> </ul>	対象との関わり
<b>(2) 自立心</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・スキーの経験が少ない幼児も途中であきらめずに目的地までスキーを履いたまま滑っていく（事例1, 事例2）。</li> </ul>	自分なり・自分たちなりの目的
<ul style="list-style-type: none"> <li>・うまく滑れなかったり築山を登れなかったりする幼児が保育者と講師の助言を聞いて考え、自分で体を動かそうとする。うまくできることで達成感を味わう（事例2）。</li> </ul>	自分なり・自分たちなりの目的
<ul style="list-style-type: none"> <li>・築山からの滑り方を自分で選択し、達成しようとする（事例2）。</li> </ul>	自分なり・自分たちなりの目的
<b>(3) 協同性</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「サーキットを滑る」という目的を共有し、仲間が滑る様子をよく観察する（事例2）。</li> </ul>	仲間との関わり
<b>(4) 道徳性・規範意識の芽生え</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・サーキットの途中（トンネル、玉入れ、風船タッチ）で前の幼児の様子を見ながら順番を待つ（事例2）。</li> </ul>	仲間との関わり
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「玉入れは、入っても入らなくても1人2回ずつ投げる」というルールを幼児同士で確認し合う（事例2）。</li> </ul>	仲間との関わり
<b>(5) 社会生活との関わり</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・スキーの講師とすぐに打ち解けてスキーを教えてもらう（事例1, 事例2）。</li> </ul>	興味・関心との出会い
<b>(6) 思考力の芽生え</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・スキーを履いたまま転ばないように玉入れのボールを拾って投げる、転ばないようにジャンプして風船にタッチするなど、ねらいを定めて目標を達成しようとする（事例2）。</li> </ul>	自分なり・自分たちなりの目的
<b>(7) 自然との関わり・生命尊重</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・スキーの体験を通して雪と触れ合う（事例1, 事例2）。</li> </ul>	対象との関わり
<b>(8) 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚</b>	
該当なし	—
<b>(9) 言葉による伝え合い</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・スキーの履き方や築山の坂道の登り方などについて、保育者と講師の話をよく聞く（事例1）。</li> </ul>	興味・関心との出会い
<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育室に掲示された園庭のサーキットの図に興味を持ってみながら、読み取った内容や予想したことを仲間と伝え合う（事例2）。</li> </ul>	興味・関心との出会い
<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育者が話すスキーのサーキットの説明をよく聞く（事例2）。</li> </ul>	興味・関心との出会い
<b>(10) 豊かな感性と表現</b>	
該当なし	—

事例を取り上げており、本研究では屋外の教師主導の運動遊び(スキーを体験する設定保育)を行った。両事例を比較した中で大きく異なるのは以下の2点である。第一に、本田他(2018)の事例ではほとんど教師が関与せず幼児たちのみで遊びが続いていたが、本研究の事例では設定保育の中で一人ひとりの幼児にあわせた保育者の援助が行われた。そのため、本事例では幼児の挑戦的意欲に関わるとされる保育者の援助を検討することができた。第二に、本研究の事例では運動能力や技能が要求され、そこで生じた困難に立ち向かい、達成感を味わう体験が経験されやすかった点である。すべての幼児の安全に配慮した環境を構成した上で、第3回(事例2)では幼児がスキーの滑り方を自己選択、自己決定する機会を設けることで、杉原他(2010)が指摘する幼児期の運動発達に欠かせない要素を取り入れた。そのうえで個々のスキーの技能を把握し助言をしたり体を直接支えたりする保育者の援助を通して、幼児が「したかったけどできなかったことが、できた」と体験する機会が得られたと思われる。

このような実践を行うにあたっては、スキーを楽しむのに程よい量と質の雪、保育当日の天候など統制できない環境の影響、園庭の築山や幼稚園が利用できる十分な量のスキー用具といった物的環境、幼児を対象としたスキーの指導・援助ができる幼稚園外の講師や保育者という人的環境、などが揃っていることが必要である。そのため、どの園でも実践できるものではなく、実践した幼稚園の特色ある保育の一つと言えよう。一方で、運動能力や技能の向上が結果として得られる保育は季節を問わず屋内や園庭で展開され得るものであり、それらの遊びを挑戦的意欲の点から分析し本研究と比較・考察することはできるであろう。

## (2) 挑戦的意欲と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連

本研究の中で「自立性」に該当すると判断された姿の特徴は、「自立性」の中核的な内容である粘り強く取り組む姿であった。本事例では、ただ単にスキーの技能の向上を図ったのではなく、一

人ひとりの幼児のスキーを扱う様子を観察し、実現したいことを保育者とスキー講師が読み取り、実現するための体の使い方やスキーの扱い方を分かりやすく伝えたり体を支えたりする援助を行った。そのような保育者の援助が幼児の諦めずに取り組もうとする姿や、達成できた感覚を経験することにつながったと思われる。言い換えれば、情緒的に安定しやすい環境が構成された中で年長児が経験の少ないことに取り組む際に、保育者の援助を受けながら自分なりの目的に向かって粘り強く取り組むことで達成感を味わったという経験である。

本事例の年長児は数か月後に小学校に進学し、その直後にほぼ初めての小学校環境の中で初めて体験することに多く遭遇する。そして、小学校教師の援助を受けながら新たな生活になじみ、達成感を得ていく経験が期待される。本事例では年長児にとってスキーの技能が向上したことよりも、大人(保育者やスキーの講師)の援助を受けながら未経験の(あるいは経験の浅い)事柄に諦めずに取り組めば一定程度の達成感を味わえるという経験をしたことに幼児教育としての意味があったと思われる。

## (3) 本研究におけるドキュメンテーションを用いた保育カンファレンスの特徴

本研究では園庭でのスキー体験を事例に観察者である研究者がドキュメンテーションを作成した。スキーに慣れていない幼児もおり、怪我や事故への注意が必要な状況であったため、スキーの講師がいた上でも保育者が子どもの様子を細かく観察し理解しようとするのが難しかったと思われる。そのような状況で幼児の姿、環境の構成、保育者の援助について理解を深め、幼児教育の質の向上をめざすという点にも、観察者がドキュメンテーションを作成するという本研究の方法の利点が挙げられよう。

さらに、数日にわたって続く設定保育の場面を取り上げて保育カンファレンスを行ったため、次の環境の構成や保育者の援助に関する話し合いの結果を保育者がどのように取り入れ、その結果

子どもたちにどのような姿が見られたかを検討することができた。この点は1日分のドキュメンテーションを資料として分析した本田他(2018)との違いであると言える。

## 2. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界と今後の課題として以下の2点が挙げられる。第一に、スキー以外の運動技能や経験を必要とする活動の事例を挑戦的意欲や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から検討することである。複数の事例を集積し検討することで、遊びの特徴と挑戦的意欲のプロセスについてより詳細に記述することが期待される。

第二に、本田他(2018)と同じく挑戦的意欲の発達の変化の検討が挙げられる。今後は4歳、3歳、そして保育園及びこども園の3歳未満児の遊びを分析することで挑戦的意欲の発達の様相を明らかにすること、ひいては挑戦的意欲を含む社会情動的スキルの発達過程を明らかにすることが課題である。さらに、本研究では幼児集団の遊びを挑戦的意欲からとらえたが、個別の幼児の事例を追跡する研究も発達の変化を検討する上では必要であろう。

## 引用文献

秋田喜代美(2016a). 研究の目的と実施体制 日本教材文化研究財団 子どもの挑戦的意欲を育てる保育環境・保育材のあり方 pp.11-19.

秋田喜代美(2016b). まとめにかえて —— 今後の課題 —— 日本教材文化研究財団 子どもの挑戦的意欲を育てる保育環境・保育材のあり方 pp.145-146.

平岡英樹・小田進一・関原聖子・小西悦子(2012). 年長児のスキーの取り組みについて —— 北海道文教大学附属幼稚園年長組のスキー授業 —— 北海道文教大学論集, 13, 129-139.

平岡英樹・小田進一・小西悦子・山本里美子・村中大御(2013). 年長児のスキーの取り組みについて(2) —— 北海道文教大学附属幼稚園年長組のスキー授業の展開 —— 北海道文教大学論集, 14, 177-183.

平岡英樹・小田進一・山本里美子・松尾さより(2014). 年長児のスキーの取り組みについて(3) —— 北海道文教大学附属幼稚園年長組のスキー学習計画 —— 北海道文教大学論集, 15, 141-150.

平岡英樹・小田進一・村中大御・細田奈津子(2015). 年長児のスキーの取り組みについて(4) —— 北海道文教大学附属幼稚園年長組のスキー学習 今後の課題 —— 北海道文教大学論集, 16, 05-213.

本田真大・伊藤公美子・滝谷舞(2018). 幼稚園年長児の自由遊びにおける挑戦的意欲 北海道教育大学紀要(教育科学編), 69(1), 1-10.

河邊貴子(2015). 子どもの育ち合いを保障する遊びとは何か —— 「遊びの状況」に着目して —— 保育学研究, 53, 296-305.

文部科学省(2012). 幼児期運動指針

文部科学省(2017). 幼稚園教育要領

無藤隆(2016). 幼児教育の効果と社会情動的スキルの指導 無藤隆・古賀松香 社会情動的スキルを育む「保育内容 人間関係」 —— 乳幼児期から小学校へつなぐ非認知能力とは —— 北大路書房 pp.1-11.

野口隆子(2016). 子どもの挑戦的意欲と保育者の援助のプロセスを探る —— 年間を通じた保育環境・保育材に関する語りとキーワードに関する分析 —— 日本教材文化研究財団 子どもの挑戦的意欲を育てる保育環境・保育材のあり方 pp.21-28.

OECD(2006). *Starting strong II: early childhood education and care*. OECD Publishing. (OECD 星三和子・首藤美香子・大和洋子・一見真理子(訳) (2011). OECD保育白書 —— 人生の始まりこそ力強く 乳幼児期の教育とケア —— (ECEC) の国際比較 明石書店)

OECD(2015). *Fostering social and emotional skills through families, schools, and communities*. (OECD 池迫浩子・宮本晃司・ベネッセ教育総合研究所(訳) (2015). 家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成 —— 国際的エビデンスのまとめと日本の教育実践・研究に対する示唆 —— ベネッセ教育総合研究所) Retrieved from [berd.benesse.jp/feature/focus/11-OECD/pdf/FSaES\\_20150827.pdf](http://berd.benesse.jp/feature/focus/11-OECD/pdf/FSaES_20150827.pdf) (2018年3月15日)

佐々木晃(2018). 0～5歳児の非認知的能力 —— 事例でわかる! 社会情動的スキルを育む保育 —— チャイルド本社

杉原隆・吉田伊津美・森司朗・筒井清次郎・鈴木隆弘・中本浩揮・近藤充夫(2010). 幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係 体育の科学, 60, 341-347.

杉原隆(2014). 幼児期の運動能力、体力の捉え方 杉原隆・川邊貴子(編著) 幼児期における運動発達と運動遊びの指導 —— 遊びのなかで子どもは育つ —— ミネルヴァ書房 pp.3-11.

高橋健介・小林明代(2016). 保育カンファレンスにおけるドキュメンテーションの活用 請川滋大・高橋健介・相馬靖明(編著) 保育におけるドキュメンテーションの活用 ななみ書房 pp.42-54.

請川滋大・高橋健介 (2016). ドキュメンテーションの意義 請川滋大・高橋健介・相馬靖明 (編著) 保育におけるドキュメンテーションの活用 ななみ書房 pp.4-11.

## 注

1. 野口 (2016) の原文ではそれぞれ「安定」, 「興味関心との出会い」, 「対象との関わりの中で」, 「仲間との関りの中で」, 「自分なり・じぶんたちなりの目当て」であるが, 本研究では若干文言を修正した。
2. 本研究の当初の計画にはなかったが, 作成された3つのドキュメンテーションは, 年長児クラスの最後の保護者懇談会 (2月下旬) において実際に保護者に呈示する形で保育の理解として活用されるとともに研究成果の報告となった。

## 付 記

本研究にご協力頂きました幼稚園の皆様, ドキュメンテーションの作成についてご教示頂きました保育園及び認定こども園の保育者の皆様に感謝申し上げます。

(本田 真大 函館校准教授)

(伊藤公美子 附属函館幼稚園教諭)

(滝谷 舞 附属函館幼稚園教諭)

